

らない。たとえ帝王切開になったとしても妊婦が妊娠・分娩に主体的にかかわり産んだという達成感や充実感、満足感を得ることは出産後に続く育児により効果をもたらすと考えられるためマタニティヨーガを継続して行っていくことが重要であると考え。また、プロジェクトメンバーだけではなくスタッフの協力があつたからこそここまで軌道に乗せることができたと考え。

4. 今後の課題

- 1) 新たな人材の育成（資格取得に自費で約10万円程）
- 2) 開催回数、産後のヨーガ教室開催の検討
- 3) 予約やキャンセル対応などインターネットが活用できないか検討
- 4) スタッフへのマタニティヨーガの周知、病棟勉強会の継続
- 5) 参加者の声をこれから参加し、出産される妊婦に届けていきたい
- 6) マタニティヨーガ参加者の満足度や分娩時間の変化などを量的、質的に研究していく

VI. おわりに

妊娠、分娩という機能は本来、女性の体に備わっているものである。そのメカニズムに自分の体と

心を無理なく合わせていくための一助としてマタニティヨーガは好評で効果があるといえる。今後の課題は多くあるが妊婦にとって満足のいく良いお産のお手伝いができるよう今後もより良い教室運営を目指して検討を重ね活動を広げて行きたい。

今回活動報告をまとめるにあたり、ご指導、ご協力をいただいたスタッフのみなさま、ヨーガ実施担当者の方々にこの場をかりてお礼を申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 森田俊一、マタニティヨーガの効果、ペリネイタルケア、2005、夏季増刊、70-71
- 2) 八木美佐子、加藤宗寛、マタニティヨーガ継続が高年初産の分娩に及ぼす効果、母性衛生 54 (4) : 612-618
- 3) 森田俊一、マタニティヨーガ、周産期医学 2002 ; 32 : 128-131.
- 4) 九島璋二、森田俊一、森佐和子、自然出産とマタニティヨーガ「からだ」と「こころ」のリラクセス法、メディカ出版、2010
- 5) 森田俊一、妊婦のためのヨーガ妊娠・分娩を楽にする体操、メディカ出版、2011

ショートカンファレンスの充実を図るための取り組み ～スタッフの意識変化について～

7-3病棟 杉山 睦実 鈴木 律子
森川 恵子 星野 菜摘
高橋 倫世

I. はじめに

7-3病棟は、深夜リーダー看護師と部屋持ち看護師のショートカンファレンス後、業務が始まる。部屋持ち看護師が、その日患者とどのように関わるかを個々に発表し、意見交換をしていた。しかし、部屋持ち看護師の発表は、ワークシート内容や深夜看護師の補足した情報を読み上げるだけであった。そこで、もっとカンファレンスを充

実させたいと考えた。現状把握と改善をすすめ、新たなカンファレンスを開始してから半年が経過する。新ショートカンファレンスの評価と、更なるカンファレンスの充実のため、今回の取り組みを振り返る。

II. 方法

1. ショートカンファレンスプロジェクト発足

2. 現状把握 アンケート調査①
3. アンケート結果分析・問題点の明確化
4. 新ショートカンファレンス運用開始
5. 新ショートカンファレンス実施評価 アンケート調査②

Ⅲ. 目 的

1. 個性のある看護ケアについて話し合いができる
2. スタッフ間の業務調整や新人スタッフなどへの教育ができる

Ⅳ. 目 標

1. ショートカンファレンスの充実が図られ、スタッフ全員が情報共有できる
2. ショートカンファレンスで自分の意見が伝えられる

Ⅴ. 結 果

現状把握のため、アンケート調査①（図1、2）を実施した。その結果、開始時間が曖昧なことや人が集まらないという時間に関する問題と、ワークシートを読み上げるだけであること、看護の視点がみえないというカンファレンス内容に関する問題が挙げられた。そこで、二つの問題に対し、分析を行った。時間に関する問題に関しては、カンファレンスの開始と終了時間の設定をした。カンファレンス内容に関しては、カンファレンス前に情報収集をしていないと答えたスタッフが2割程

いた。そして、情報収集の時間がないことや不足していること、情報収集の内容が不十分であることが要因と考え、始業後に情報収集の時間を確保した。そして、効果的な情報収集とは何かについて検討をし、カルテだけではなく患者の情報収集も重要であると考えた。まずは患者のベッドサイドに行くこと、そこで患者の表情や状態を自分の目でみてきて、現状をアセスメントするという方法を提示した。

新ショートカンファレンスを開始し、半年が経

Q4. カンファレンス前に情報収集をしているか

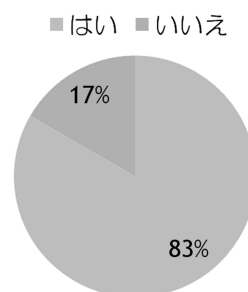


図2

カンファレンスの発言に変化はあったか

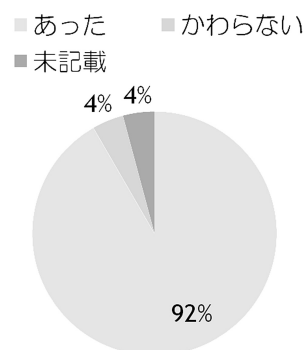


図3

Q1. ショートカンファレンスの時間についてどう思うか

■長い ■短い ■ちょうど良い

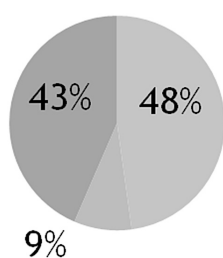
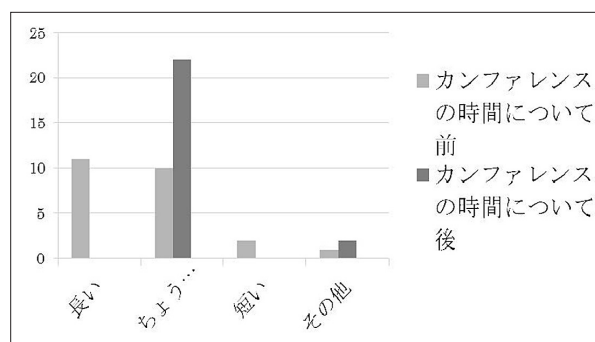


図1

表1 カンファレンスにかかる時間



過したところでアンケート調査②（図3，表1）を実施した。カンファレンスにかかる時間に関しては、ほぼ全員がちょうどよいと答えている。カンファレンスの発言に変化はあったかの問いに対し、9割以上があったと答えている。具体的には、自信をもって発言できるようになった、確認や相談ができる場となり、話し合いが深まる、主体性を持って情報収集をするため個別性のあるケアを考えるようになった、患者の状態がわかり、一日の行動計画が立てやすくなったという感想が挙げられた。

VI. 考 察

ショートカンファレンスの時間を設定し、患者のベッドサイドに行く時間を確保することで、時間を有効に使うと意識して行動するようになった。そして、時間を意識することで、行動にメリハリが生まれ、緊張感が生まれた。また、新ショートカンファレンスを行う前は、情報収集ができずにカンファレンスに参加していたスタッフもいたが、時間確保したことで全員が患者のもとへ行き、情報収集をして、カンファレンスに臨めるようになった。そして、カルテやワークシートでは伝わらない患者の状態を、より明確に捉えられるようになったことで、患者のベッドサイドでの情報収集の大切さを改めて感じる事ができた。また、効果的な情報収集ができるようになったこと

で、自分の情報に対して自信が生まれ、カンファレンスで発言ができるようになった。新ショートカンファレンス前はリーダーと部屋持ち間でのやりとりが多かったが、改善後は、カンファレンスを通して、チームでそれぞれの持っている情報や経験を活かしたケアを提供できるようになった。そして、互いの情報を共有できるようになったことで、継続したケアの提供につながった。また、カンファレンスの場を通して、新人に対するアドバイスをしやすく、新人も相談しやすくなった。

VII. まとめ

個別性のある看護ケアの提供を目標に定め、問題点を明確化して改善を図ったことで、ショートカンファレンスの意義を再確認できた。チーム医療として看護ケアを提供する上で、ショートカンファレンスの更なる充実が必要であると考えた。その為に、スタッフ間のコミュニケーションと、個々のアセスメント能力の向上が不可欠である。

参考文献

- 1) 日本看護診断学会 監訳：NANDA-1看護診断 定義と分類2012-2014, 医学書院, 2012
- 2) 古橋洋子：実践！看護診断を導く情報収集・アセスメント, Gakken, 2004
- 3) 高橋百合子：看護過程へのアプローチ2情報と記録, 学研, 1991

効果的なデスカンファレンスを目指して ～受け持ち看護師への働きかけを行っての評価と課題～

3-6病棟 杉本ちえみ 梅原佳代子
久保山涼彩

I. はじめに

私たちは日々様々な患者とその家族に関わり、そしてその死にも大きく関わっている。

3-6病棟は呼吸器疾患、循環器疾患、その他慢性の経過をたどり終末期を迎える患者が多い。呼吸器では肺癌のため化学療法目的で入退院を繰り返す患者とは長い経過を共有し、様々な過程を通して関係性を築いていく。後にその患者たちが終末期を迎えるケースが非常に多い。最近では血液内科の患者も増えてきている。また心不全やCOPDのように慢性期疾患の患者が急な病状の悪化から亡くなること、そして高齢者で延命治療を望

返す患者とは長い経過を共有し、様々な過程を通して関係性を築いていく。後にその患者たちが終末期を迎えるケースが非常に多い。最近では血液内科の患者も増えてきている。また心不全やCOPDのように慢性期疾患の患者が急な病状の悪化から亡くなること、そして高齢者で延命治療を望